

日本語における挨拶のことば

アンナ・ドンブロフスカ

1. はじめに

言語は人と人とのコミュニケーションのためにあるだけではなく、文化の土台になっている。また、逆に民族の歴史や社会の変化、発展なども言語に行われるはずだ。言葉は社会の本質に属するものであり、それなくして社会は成立しない。ジャン・ジャック・クルソーは「ことばは諸道物の中から人間を差別し、言語は諸民族をお互いに差別する」と言っている。奥山益朗はそれに「同一言語の諸民族の結束される」と加える。

言語そのように考えると、外国語の勉強は言葉や表現の使い方に限らず、その背景に隠れているさまざまな現象を学ぶことにもなる。

ポーランド語が母語の私は、日本語の知識を深めるに連れ、不案内な言語行動に触れる機会も多かった。挨拶というものもその中の一つである。あいさつに興味をもったのは、私の母語にも、また一般的にヨーロッパの多くの言語にも、日本語ほど意味の範囲が広く、あいまいな意味概念を含むあいさつはないように思ったのが第一の理由だった。

あいさつ語辞典には「あいさつは人間の言語活動としてはごく初歩的なもので、人間関係をスムーズにする潤滑油のようなものである。これはなくして、二人、あるいはそれ以上の人々の間柄はギスギスしてしまう」と書いてある。来日して、この定義の意味を実際に感じる事ができた。

日本で知り会った熊本出身の友達に何回も「熊本にぜひ遊びにきて」と誘われた。留学しているうちにできるだけあちこち日本を旅行したいと思っていたので、熊本へ行くことにした。九州につき、その友達に電話をすると、どうしてなのか分からないが、困惑した声が私の耳に聞こえた。私はその友達が迷惑だと感じ、あまり私に来てほしくないのだと分かり、すごすごと引き返した。ちょっと腹が立ったのは言うまでもないが、すこし時間が経ってから、外国人の友達に不思議な出来事の“言語社会的な”説明をしてもらった。日本人はよく「遊びにきてください」という言い方をするけど、ほんとうは言う通りに思わない。ただのあいさつにすぎない。私の驚きは“なるほど”という納得になり、もっと深くこの言語行動を調べなくてはとだんだんおもうようになった。

2. 挨拶の定義

挨拶という言葉はポーランド語に訳せないほど色々意味を覆われる言葉である。その上、日本語でもはっきり定義できない。

日本国語大辞典によると、

- 1) 手紙の往復、応答のことば。
- 2) 交際を維持するための社交的礼儀。人と会った時、別れる時などに取り交わす礼儀、応答の言葉や動作。
- 3) 儀式、就任、解任などの時、祝意、謝意、親愛の意などを述べること。
 - イ) とりもち、仲介、紹介、世話
 - ロ) 仲裁、調停、とりなし
- 4) 人と人の間柄、両者の仲、交際、付き合い
- 5) 仕返しをいう不良仲間の隠語

挨拶という言葉に関わる表現自体も多重多様である。

あいさつを切る	-	人と関係を絶つ・縁を切る・絶交する
あいさつがあがる	-	争いの仲裁・とりなしが打ち切れる
あいさつをあげる	-	争いの仲裁・とりなしをやめる
あいさつまわり	-	謝意や敬意などをのべにあちこち回って歩くこと
あいさつ者	-	客あしらいのうまい者、愛想の良い人
あいさつ柄	-	人と応対にふさわしい言葉とふるまい、また、あいさつする様子
あいさつより円札	-	言葉を尽くしての例を受けるよりは、金銭をもらったほうがよいの意。あいさつの「さつ」と円札の「札」と同意を重ねたしゃれ。
あいさつ人	-	人の間に立ってよいように計らう人。とりなしをする人、仲介者
あいさつ金	-	札を詫びなどのしるしとして相手に差し出す金
あいさつ代わり	-	日常のあいさつ代わりに取り交わす言葉や振る舞い。また、初対面や訪問のしりしに相手に差し出す物品。
あいさつ心	-	言葉やしぐさで相手に対する敬意や親愛を示し対人関係を円滑にしようとする心。

挨拶という言葉の二つの漢字の意味は

「挨」－ おす、おしのける、押して進む／背をうつ／近づく、迫る／擦りつける

「拶」－ 迫る、押し迫る、指に締め付けるもの

とある。これらの漢字は二つともその意味に「近づく・近寄る・接近する」というニュアンスが分かる。この接近のニュアンスは人と人の間柄に関係があるのだろう。

“greeting”とか” formal greeting”というありふれた挨拶の翻訳では意味が狭すぎるように思われる。あいさつは形式化、儀礼化された日本社会のしきたりを反映する言語行動だとも聞いた。このしきたりについてはすこし触れておこう。

III. 挨拶と敬語

すでに述べたように、言語にはその社会の歴史や文化が反射されているはずだ。日本語の場合はどんな文化背景を持っているのだろうか。

まず考えられるのは儒教の影響だと思う。現代の日本では孔子の教えはすでに忘れられているようだが、言語層では受け継がれているようだ。この島国の言語と文化を深める人は、日常の生活のあちこち出会う「義理・義務・恩・仁・礼儀」など、強く儒教に結びついた観念に感銘を受ける。

次に封建制度は日本語に明らかに映し取られていると思える。古い時代には、社会的階層というものがはっきりとあったようで、それに従って、下関係は言葉づかいの上で強い規制力をもっていた。徳川幕府が開かれ、江戸時代になると、以前から存在していた身分の区別と言うものが、社会の中で固定して認められるようになった。「士農工商」という言葉で知られるように、人々の階層は武士（士）・農民（農）・職人（工）・商人（商）の順に尊敬すべきものとされた。身分の上下に従って言葉づかいにも色濃く表されていたはずである。現代では、社会的階層が不明瞭になり、地位の上下というファクターが言葉づかいの上でも弱くなってきたと思われる。

しかしながら、現代の日本語でも会話をする場合に話し手が様々な社会的なファクターを顧慮し、それに従ってその場にふさわしい、いわゆる「待遇表現」を選ぶ。この社会的なファクターがどんなものか少し触れておこう。

1. 上下関係

先輩・後輩の関係（経験の長短）

親族の関係

年齢の上下

男女関係

2. 立場関係

恩恵を与える立場／受ける立場（恩恵授受関係）

権限をもつ立場／相手の権限に委ねなければならない立場（権限・従属関係）強い立場／弱い立場（強弱関係）

3. 親疎の関係

4. 内／外の関係

IV. 挨拶表現の構造

人が対面した時のあいさつ

お早う	-	昔「お」接頭辞なしは朝早く働きに來た人に対して使った言葉。接頭辞を加えてから朝のあいさつとして使えるようになった。丁寧な形は「おはようございます」。
こんにちは	-	これも敬語がつけにくいことばで、下略の例である。おそらく昔は「こんにちはいいお天気で」加えていたのだろうと奥山は書いている。今となって、「こんにちは」だけで独立し、昼前から夕刻まで人に会った時使えるあいさつ語になった。これは下略の例で、敬語がつけにくいことばである。
こんばんは	-	夜の訪問や対面の際のあいさつ。「こんにちは」と同様下略された形。
お邪魔します	-	元來は仏教語。仏の教えにそむく誤った考えを主張して、菩提道に入るのを妨げる悪魔。転じて他人の妨げ、迷惑になること。
失礼します	-	礼儀を欠くこと・礼儀をわきまえないこと・不作法なことなどの意味 「失礼」という言葉から由来する。三つの「失礼」「失礼します」「失礼いたします」丁寧さの度合いを区別できる形で使われている。

例 1 :

僕はまだご飯を食べてないから、一寸失礼して近所で食べてくる。

例 2 :

-承知しました。早速調べます。

-それでは失礼します。

ただいま	-	外出から帰った時の挨拶。元の意味は「現在」である。「ただいま、帰りました」の下略である。
------	---	--

- お久しぶり - 長い間会わなかった人が対面した時のあいさつ語。
- 御免なさい - 中国語の「御免」と言う言葉から由来する。元々の「許可・認可」の意味から今日の御免なさいの意味に発展した言葉。あいさつとして、ただの社交表現の働きではなく、社会的な接触をするために使う。封建時代には現代の「お邪魔します」という表現と同じ意味で、人の家を訪問したとき使われる言葉、また知人と別れる時のあいさつ。現代の「では・じゃあ・ではまた・じゃあまた・じゃあさようなら」などのあいさつに当たるいいまわし。
- すみません - 「済む」というの動詞の否定文。「済まない」は人に対して申し訳が立たない。謝罪や感謝の意味を表す。ことに最近「ありがとう」に代わって「すみません」を使う人が多い。

例 1 :

お島さん、どうもすみませんね」などと、仕事から帰ってきた若い者が声をかけたりした。

例 2 :

どうもすみません。色々ご心配をかけてしました。

例 3 :

すまねえが、お前、後で渡辺さんに電話をけかといてくれ。

V . 行動としての挨拶

あいさつは人間関係を円満にするものである。しかし、これは国語の問題であるとともに作法の問題でもあり、固定した、複雑な言葉に限らず、おじぎ、ものごし、動作、態度、身振り、手振り、目つきなども挨拶という言語行動に絡んでいる。場合によって、言葉のほうはあっさりしているが、それにつけ加える身振りや仕草、表情が率直に敬意を表しており、その方が、より多く相手の好感をより多く得ることがある。つまり、あいさつは体全体で表すものである。が、その中で主な「伝達装置」としての働きは言葉に置かれているはずである。言葉というものは歴史的、伝統的に認められた一定した言い回しである。

戦後の日本では平等主義を広めるために 1957 年に文部省が「これからの敬語」という文書を発表し、現代の敬語の使い方を提案した。しかしながら、敬語を簡単にする一方で、一定した表現と見なせるあいさつの有様は保護すべきものであると主張した。

私の母語、ポーランド語では、逆に、定まった表現はできるだけ避ける傾向があることに気がついた。話しかけたり、手紙を書いたりするとき、いつも別の表現を探し、新しく

あいさつの言葉を作ることも多い。ところが、日本ではあいさつの仕方を知らないことでお互いに誤解することが多い。(私が間違って理解した「遊びに来て」は一つの例)

日本は団体社会であると思われる。それぞれの日本人は何かグループに属する。グループには家族・会社・サークル・知人たち・町・田舎などいろいろある。たとえ戦後の社会の平等化が進んだにせよ、自分がどういうわけで他人に対して先輩・後輩になったりしてしまう。

日本人が一日の生活で使っている多くのあいさつ普通は、知り合い同士・家族同士・同僚同士のあいさつである。エレベータに会った人、同じ電車に乗っている人、バスで隣の席に座っている人に対して、あいさつをする必要は全くない。

なぜかという、あいさつは敬語と密接に結びつき、相手の評価、格付けの基準の一つになるからである。あいさつするときに話し手は社会的地位、年齢、男女の性別、学歴、売り手と買い手など、上下関係をいろいろ整理しなければならない。また、ここで扱っていない日本語の代名詞も様々な問題の原因となる。特に、人を指し示す場合、実名・愛称・地位・役職名・職業・役割名・親族名など多彩なバリエーションの中から呼称を選ぶことができる。二人称の例を挙げるとそんな言葉の豊かさが実感できる。

二人称代名詞： あなた・きみ・おまえ・あんた・おたく・きさま・そちら

実名・愛称： 山田 (…／さん／さま／くん／ちゃん) 山ちゃん・アッコ

地位・役職名： 課長・部長・社長・会長・議長・委員長・総理

年齢階梯語： ねえちゃん、おばさん、奥さん、おやっさん、

地名・国名： ポーランドさん

あいさつは、何と言っても会話の前奏曲であり、その場の人間関係を設定するものである。いったん設定されると、後はだいたいその格差を守り通すのが普通である。こういうわけで話題・聞き手・話し手を描写するために積極的に用いられ、あいさつはその人物についてさまざまな情報を与えてくれると言われる。

日本語のあいさつをポーランド語に訳すのは非常に難しい。なかなかピッタリの言葉が見つからないので、語源的な分析や社会背景の説明するほかないと思う。その例としてとして短い会話を挙げてみたい。

-御免ください。

-はい、あっ、田中さん、いらっしやいませ。

-よくいらっしやいました。さ、どうぞお上がりください。

-じゃ、失礼します。

-やあ、渡辺さん、お久しぶり。どちらへ？

-いや、ちょっと。

-それは、それは、では。

-じゃ、また。